

メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究 —マヤ・ユカテカのカトリック村落マニの空間感覚分析のための序論的考察—

A Study of Catholic Culture Integration of Lowland Maya Communities in Mexico
—An Introductory Study of Experimental Methods for Analysis of Space Perception
at the Individual Level of a Mayayucatecan Catholic Community, Mani—

中別府 温和

小論の目的は、メキシコの低地マヤ・ユカテカの一カトリック村落マニにおける宗教的文化統合のあり方を、空間感覚という視点から解明することである。

宗教的文化統合は仮説的概念である。「宗教が文化の中心に位置していて、その文化のある部分を濃く、ある部分を弱く色づけている」と仮説的に考えて、社会を調査し分析していくために作成されている。この仮説に立つことによって、宗教現象の諸特性を時間感覚、空間感覚、社会構造、政治経済的態度などの視点から具体的に分析し、個人的断面と集団的断面の両面において、宗教現象の科学的解明を試みる。

本稿では、1983年以来、マニにおいて実施してきている空間感覚の調査研究の最終段階として、有意味写真の構成方法ならびにそれに関連する仮説的見解と調査方法を提示し、空間感覚分析の序論的考察を行った。具体的には、有意味写真を使用した調査を行うにあたって、最初に、考古学と歴史学の史資料を使用して、低地マヤの一カトリック村落マニに関係するマヤ的な空間構造の一側面を提示し、次に、その古代マヤ的な要素はスペイン人征服後のヨーロッパ的・カトリック的要素と混在し複合しつつ存続してきている実態を提示し、それらの考察を踏まえて、空間感覚を個人レベルで抽出する具体的方法を提示した。

有意味写真を使用した空間感覚に関する調査結果を、これまで蒐集してきた説話伝承、社会構造、儀礼慣習の領域での空間感覚に関する調査結果と総合することによって、全体としての空間感覚をより厳密な内容にしていく。

キーワード：社会構造、マヤ、共有地、エヒード、有意味写真

目次

I はじめに

II マニの中心 (*El Centro ; Kiwic*) と居住区域 (*Barrios*) —中心と四方という考え方—

- III マニの土地と所有地の歴史的展開—共有地という考え方—
- IV マニの土地と所有地—土地の公共性という考え方—
- V 有意味写真を使用した空間感覚の分析
- VI おわりに

I はじめに

筆者は、従来、マニにおける空間感覚を主として、説話伝承、社会構造、儀礼慣習の領域で調査研究してきた¹⁾。現在は、空間感覚抽出の最終段階として、有意味写真を使用した調査を継続している。有意味写真を使用した調査結果を、説話伝承、社会構造、儀礼慣習の領域での調査結果と総合することによって、全体としての空間感覚はより厳密な内容になると考えている。事象は集団の成員によって共有されかつ分有されているのであるから、集団の断面と個人の断面の両面で分析し、それらを総合する必要がある。

本稿では、有意味写真を使用した調査を行うにあたって、古代マヤの空間構造とマニの土地に関する基本的事実とそれを材料として組み立てた有意味写真による調査方法の骨格を提示し、空間感覚分析のための序論的考察としたい。

マニの空間感覚分析の序論的考察のために、最初に、考古学と歴史学の史資料を使用して、低地マヤの一カトリック村落マニに関するマヤ的な空間構造の一側面を提示する。空間構造は、時間構造とともに、社会や文化の基底に存在して人々の考え方や行動を規制するので、人々によって共有され分有されながら長期間にわたって残存する。この意味で、マニの人々の空間感覚を分析するためには、古代マヤの空間構造を把握し、それらの残存を視野に入れて調査する必要がある。ここでは、マニの土地に関してこれまで明らかにした基本的事実を提示する。とはいえ、現在までにマニの土地を対象として調査が行われたことはないので、マニの土地に関係すると考えられる調査結果と筆者が行った現地調査結果の一部を提示し全体を構成する。

次に、その古代マヤ的な要素は、マニにおいて、スペイン人による征服後のヨーロッパ的・カトリック的要素と混在し複合しつつ存続してきている実態を提示する。ここでは筆者による現地調査結果を提示する。さらに、マニにおいて土地がどのようにとらえられているかを提示する。空間感覚を調査分析する場合、土地がどのようにとらえられているかは重要な意味を持つからである。土地をめぐるは、土地の私的所有権ならびに財産権を尊重し、その私的所有権に対する公権力の介入や制限を最小にする考え方がある一方、土地の公共性を尊重し、公共財としての土地の使用権を重視する考え方がある。次にその一部を引用するメキシコ憲法27条は、後者の考え方に重心を置き財産権を制限するという特徴をそなえている。

国土の境界内に含まれる土地と水の所有権 (propiedad) は、本源的に国家に属する (corresponde originariamente a la nación)。国家はそれらの支配権 (dominio) を私人に移転する権利を過去および現在にわたって有し、これによって私的所有権 (propiedad privada) を構成する。

メキシコ憲法27条は土地と水の本源的所有権を国家に帰属させ、その本源的所有権を土地使用権による支配権と区別している。国家によって私人に移転された私的所有権は制限されるべきで、土地に関しては土地使用権を保障する考え方である。

この考え方にもとづいて土地の使用権を保障し、その土地の所有権は国家が持つ一例がエヒード (ejido) である。エヒードは、「農地改革によって、詳細にいうと、返還 restitución (アシエンダ hacienda に奪取された土地の本来の共同体への返還) あるいは譲与 dotación (土地を得る目的で新たに集落を形成する農民集団への土地の譲与) の手続きによって一定の範囲の土地の利用権を国家から与えられた地域集団およびその土地である。」²⁾

本稿では(1) エヒードが共有であること、(2) 個人はその共有地の割当地を耕作することによって保有すること、(3) 個人の割当地は売買・賃貸借の対象とならないこと、(4) 2年連続して割当地の耕作を怠った場合はその土地を没収されることに注目し、それらの考え方がマヤの伝統的な土地慣習を継承していることから、エヒードをはじめとするマニの土地を分析するにあたって、マニにおけるマヤの伝統的土地慣習を解明する。

最後に、それらの考察を踏まえて、空間感覚を個人レベルで抽出する具体的方法として、有意味写真の構成ならびにそれらに関連する作業仮説と調査方法を提示する。

既に、調査は実施されているが、調査結果の分析は別稿にゆずりたい。

II マニの中心 (El Centro ; Kiwic) と居住区域 (Barrios) —中心と四方という考え方—

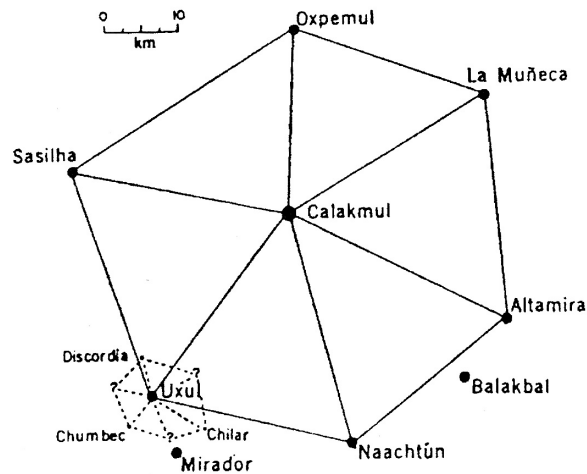
ここでは考古学と歴史学の史資料を使用して、低地マヤの一カトリック村落マニに関するマヤ的な空間構造の一側面を提示する。時間構造と空間構造は特に社会や文化の基底に存在して人々の考え方や行動を規制するので、人々によって共有され分有されながら長期間にわたって残存する。この意味で、マニの人々の空間感覚を分析するためには、古代マヤの空間構造を把握し、それらの残存を視野に入れて調査する必要があるからである。

1 古代マヤの中心と四方

古代低地マヤの空間構造と社会構造の基本的形態の発見は考古学的調査によって行われた。そ

これらの基本的形態の中で有力な見解は、祭祀センターの位階制³⁾、6 辺形首府構造 (マヤの伝統的 4 首府の周囲に 6 辺形の第二次首府 (hexagonal lattices of secondary centers) が位置し、その周囲に第三次の 6 辺形の首府 (tertiary hexagons) が位置する 6 辺形構造)⁴⁾、4 区域制 (tzucul)⁵⁾ などである。

図1 マヤの6 辺形首府構造



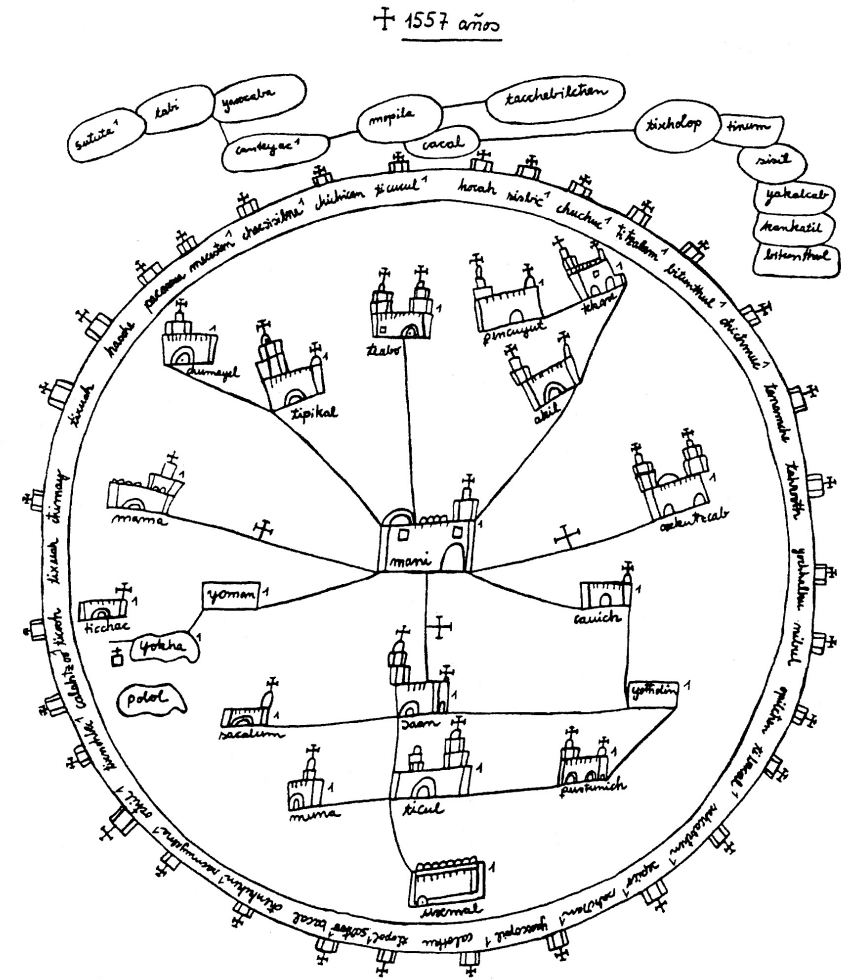
4 区域制はマイケル・コウ (Michael D.Coe 1987) がマヤの共同体構造として提示したのであるが、これらの各区域は父系外婚制 (exogamous patrilineage) であり、それぞれ特別の色と結びつけられていた。宇宙を 4 部構造と考える伝統的なマヤの思考様式にもとづいて、地球は平地で 4 隅を有し、各隅は東を赤、北を白、西を黒、南を黄、中央を緑というふうに特有の色を与えられていた。

これらの調査結果は、現時点では、低地マヤ地域の共同体の社会構造全体を厳密に明らかにするものではないが、後述するように、マヤの空間感覚の基本的部分に關係する内容を含んでいる。

2 マニの中心と周辺

16 世紀中葉のマニおよびその周辺村落におけるカトリック教会の分布は図 2 のようであった。図中の中心に位置しているマニは古来マヤ・シュウ (Xiu) 族の首都であったことから、スペイン人による征服後も地域の首府でありつづけ、マニを囲んで 8 方位に各村落とカトリック教会が分布している。このような歴史をたどってきたマニには、古代マヤ的な要素とスペイン人による征服後のヨーロッパ的・カトリック的要素が混在し複合しつつ存続してきているが、いずれの場合

図2 16 世紀中葉のマニ周辺地域 (Frauke J. Riese 1981 Indianische Landrechte In Yukatan Um Die Mitte Des 16.Jahrhunderts. s.133)



にも地域の中心という考え方が継承されてきているのである。この事実はマニの空間構造を分析する場面で見落とされてはならない。

マニの中心をめぐる空間構造の概略は次のように継承されてきている。

カトリック村落であるマニの空間はカトリック教会を軸に構成され、その中心はセントロ (El Centro スペイン語で中心地の意味) と呼ばれている。1548年に設立されたカトリック教会(写真 1 参照) がそびえ立ち、そこを起点として 6 居住区域 (バリオ Barrio スペイン語で区、地域、区域の意味) が放射線状に位置している。

6 居住区域は、サン・フアン (San Juan)、サンティアゴ (Santiago)、サン・ホセ (San José)、

サンタ・ルシア (Santa Lucia)、カンデラリア (Candelalia)、サン・イシードロ (San Isidro) と称され、各居住区単位はそれぞれ小教会を有している。

カトリック村落マニの守護聖人 (el patrón de Mani) はサン・ミゲル・アルカンヘル (San Miguel Arcangel) であり、聖母 (la Virgen de Mani) は、ヴィルヘン・デ・アスンシオン (Virgen de Asunción 写真2参照) である。

カトリック教会を軸とするセントロとは異なるもう一つ別のマニの中心はキーウィク (Kiwic マヤ語で中心の意味) と呼ばれ、マヤの説話伝承や儀礼慣習がきわめて重要な意味を与えている洞窟 (アクトゥン *actun* マヤ語) とセイバ (*ceiba* パンヤノキ 写真3参照) の木の近辺を指す。キーウィクは現実にはセントロと隣接して存在するが、スペイン人による征服前の古来マヤの中心であった。

マニのヨーロッパ的・カトリック的空間の中心であるセントロは、メスティーソ (Mestizo 白人とインディオとの混血) の政治経済的活動の拠点であり、スペイン語を日用語とする住民が暮らしている。これに対して居住区バリオは、ヨーロッパ的・カトリック的空間の中心であるセントロに対して周辺を形成すると同時に、古来マヤの中心であるキーウィクに対しても周辺を形成

していたため、マヤの伝統的な居住区域であり、マヤ系譜の人々がマヤ語を日用語として棕櫚と白色壁土のマヤ伝来の家屋に住んでいる (写真4参照)。

セントロとバリオは教会を軸とする中心と周辺の空間構造であると同時に、古代マヤの中心と周辺の空間構造と交叉し、スペイン人による征服後メスティーソがセントロに居住し政治経済的活動の支配権を掌握したことから、ヨーロッパ的・カトリック的要素対マヤ的要素の空間を構成しているのである。

3 中心と四方と色

マヤ後古典期 (Post Classic period AD 900-AD 1500) のユカタン地域における定住パタンは、考古学史料によると、各共同体の中心に神殿が位置し、その周囲に家屋が配置されていた。ミカエル・コーが指摘するように、ユカタンの全ての共同体への四つの入口には、二つの石塊が対面する形で置かれ、マヤ暦の儀礼 (ワウエブ *Uayeb*) のために使用されていた⁶⁾。この伝統儀礼に関係するそれぞれのマヤ年は、表1が表すように、四方と4色に結びつけられていたことがわかる。

写真1 マニのセントロのカトリック教会



写真3 マニのマヤ的中心にあるセイバの木



写真2 聖母アスンシオン



写真4 マニの伝統的な家屋



表1 マヤ暦の儀礼 (*Uayeb*)

儀礼年	マヤ暦	色	方位	ハッパ ⁶⁾ 神 (Bacab)	チャック ⁶⁾ 神 (Chac)
カーン Kan	カウアック Cauac (カーン)	黄	南	カナル・ハッパ ⁶⁾ Kanal Bacab (ホッパ ⁶⁾ ニル)	カーン-シップ ⁶⁾ ・チャック Kan-xib Chac
ムルック Muluc	カーン Kan (チャック)	赤	東	チャカル・ハッパ ⁶⁾ Chacal Bacab	チャック-シップ ⁶⁾ ・チャック Chac-xib Chac
イッシュ Ix	ムルック Muluc (サック)	白	北	サカル・ハッパ ⁶⁾ Sacal Bacab	サック-シップ ⁶⁾ ・チャック Sac-xib Chac
カウアック Cauac	イッシュ Ix (エック)	黒	西	エケル・ハッパ ⁶⁾ Ekel Bacab (ホサン・エック)	エック-シップ ⁶⁾ ・チャック Ek-xib Chac

スペインによる征服前のユカタンには、表1が示すように、バカッパ (*Bacab* 空の運搬人であり風の神) とチャック (*Chac* 雨の神) が四方に4色を伴って配置されていた。

ジョイス・マーカス (Joyce Marcus 1973) の発見によると、

マヤ人にとって最も重要な方位は東 (*lakin*) であり、そこは太陽が昇る場所であった。北

(*xaman*)は「太陽の右側」、南(*nohol*)は「太陽の左側」であった。他に重要な方位として西(*chikin*)と中央(*yaxkin*)があり、太陽はこの中央(*yaxkin*)の上を通過する⁷⁾。マヤ語の東—中央—西の軸線はすべてキン(*kin*「太陽」「日」「時間」)音節を持っており、日の出—日の入りの軸の重要性を物語っている⁸⁾。

このマヤの四方構造は共同体の構造を規制し、マヤの共同体はバリオ(Barrio)、ツクル(*Tzucul*)、カルプリ(*Calpulli*)の4区域に分割され、各区域は父系外婚による内婚制であった⁹⁾。

リチャード・トンプソン(Richard A.Thompson 1974)が指摘するように、マヤの6居住区域バリオは、半独立の居住区域と政治的単位として機能し、区域内住民の生活に影響を及ぼしていた。バリオは祝祭(fiesta)の実施主体であると同時に区域内内婚を優先する単位であった¹⁰⁾。

しかし、現在のマニで筆者が居住区域内婚を調査した結果、表2が示すように、リチャード・トンプソンが指摘する形態での内婚は行われていない。

表2 マニにおける居住区域間婚姻

婚出	婚入	事例数	婚出	婚入	事例数
カンテラリア	カンテラリア	4	キウック	キウック	1
カンテラリア	サンファン	1	キウック	サンシートロ	2
カンテラリア	サンタルシア	2	キウック	シカバチェン	1
カンテラリア	サンホセ	1	キウック	サンタルシア	1
カンテラリア	サンティアゴ	1	サンファン	サンファン	2
サンホセ	サンホセ	1	サンファン	キウック	1
サンホセ	サンティアゴ	1	サンファン	サンティアゴ	1
サンホセ	サンファン	3	サンファン	サンタルシア	1
サンホセ	シカバチェン	1	サンタルシア	サンタルシア	1
サンティアゴ	サンティアゴ	1	サンタルシア	サンシートロ	2
サンティアゴ	サンファン	1	シカバチェン	シカバチェン	1
サンティアゴ	サンシートロ	1	シカバチェン	サンタルシア	1
サンティアゴ	シカバチェン	1	サンシートロ	サンファン	1

現在のマニにおいてバリオは内婚の実態は示さないが、既に論究したように¹¹⁾、行政および祝祭の単位として機能している。

居住区域バリオの住民はセントロの住民をチューループ(*Chuloob* マヤ人でない人たち:よそ

の人たち)と呼んで自分たちと区別することから、マニの人々の間にはセントロと各居住区域を対立的にとらえる考え方は現在も残存している。この思考様式については、マニにおける通婚圏と姓の分析として既に明らかにした¹²⁾。

4 伝統医(メン *men* 呪医=祭司)の祈りに表れた中心と四方

中心と四方の空間構造は、マヤの伝統的思考を継承してきている伝統医(メン *men* 呪医=祭司)の祈りの中に現在も色濃く残っている。

メンは大地へ供物(サカップ *sak'ap*、バルチェ *balche* と呼ばれる聖なる酒)を捧げる場面ではマヤ語で祈るが、それらの祈りの中に、しばしば中心と四方に関係する表現が出てくる。

1) 雨乞いの儀礼(*cha'chac*)の中で捧げられる祈り

祈り(1)「聖なる酒*balche*を捧げるときの祈り」

「(前略)……偉大な東(*noh lakin*)にいる1〔人〕の*chac*へ〔捧げる〕…空の4隅(*can titzkan*)にいる4〔人〕の*balams* (*nucte balamob*)へ〔捧げる〕…偉大な東のCoba(地名)にある神の部屋(*abrencia*)にいる*dios chac*へ〔捧げる〕……(後略)」

祈り(2)「聖なる酒*balche*を捧げるときの祈り」

「(前略)……ここで私は偉大な東にいる1〔人〕の*chac*の聖なる新鮮な水(=雨水)を願う。……偉大な東にいる1〔人〕の*chac*、*balam*、*dios yumbil*、……偉大な東にいる1〔人〕の*chac*に〔祈る〕、われらの*yumbil*、偉大な東の1〔人〕の*chac*、4〔人〕の*balam*たち、…(後略)」

祈り(3)「家禽を聖別するときの祈り」

「(前略)……偉大な東にいる1〔人〕の*chac*の聖壇の前に、*dios chac*、*dios balam*、雲の中の入口(*holhuntazmuyal*)、*dios mehenbil*、*dios espiritu santo*、……*dios Balam*、雲の中の入口、……(後略)」

祈り(4)「供物が供えられた聖壇の前に跪いての祈り」

「(前略)……私の祈りが偉大な東に届いたら、……4〔人〕の偉大な*chac*たちへ、4〔人〕の偉大な*balam*たちへ、……4〔人〕の偉大な*chac*たちへ、4〔人〕の偉大な*balam*たちへ、……偉大な東にいる1〔人〕の*chac*の聖壇の前に、……空の4

隅、dios chacへ、dios balamへ、……4〔人〕の偉大なchacたちへ、4〔人〕の偉大なbalamたちへ、……dios chache、東の空の入口へ、……偉大なchacたちへ (nucte chacilob)、…… (後略)」

マヤの伝統儀礼である雨乞いの儀礼 (*cha'chac*) の中で捧げられるこれらの祈りにおいて、聖壇は *dios yumbil*、San Miguel、偉大な東にいる1〔人〕の *chac* の聖壇として語りかけられている。マニには常設の聖壇はない。これは雨乞いの儀礼 (*cha'chac*) が基本的には定期的 (periodical) なものでなく、危機対応型 (critical) の一時的なものであることとも関係するが、この儀礼が向けられる対象とその性質との関連でとらえられるべきである。

聖壇はメンや儀礼に参加する人が東に面して位置するように設けられる。メンは東に向かって祈る。マヤ・ユカテカにおいては東は偉大な方角であり、そこに雨の神チャック (*chac*) がおり、そこから雨が来る。東の空には入口のようなものもあると考えられている (写真5参照)。

供物が捧げられる対象は、偉大な東にいる1〔人〕の *chac*、4〔人〕の偉大な *chac* たち、あるいは空の4隅にいる4〔人〕の *balam* たちである。雨乞いの儀礼 (*cha'chac*) のために特定の日あるいは特定の時刻は定められていない。したがって、この儀礼と供物が捧げられている対象である *chac* たちや *balam* たちは、人々の供物をもっての働きかけに時日を問わず応じると考えられている。

雨乞いの儀礼 (*cha'chac*) の祈りの中には、願いごとの内容の数が比較的少ない。San Miguelの畑のために *chac* に頼んで雷を鳴らせてもらったり、雨を降らせてもらったりする程度である。その際 *chac* の名称が *dios chac*、1〔人〕の *chac*、4人の偉大な *chac* たち、偉大な東にいる1〔人〕の *chac*、偉大な東のCoba (地名) の神の部屋にいる *dios chac* のようにきわめて多様であることに注目すべきである。 *sak'ap* を捧げるときの祈りの中でも、雷光の神 *chac*、雷火の神 *chac*、雷鳴の神 *chac*、雷雨の神 *chac* などとして多様に呼びかけられている。

「雲の中に」、あるいは「東の空に入口のようなものがある」、「雲の4隅」、「空の4隅にいる」、などの表現にも注意すべきである。

2) サカップ (*sak'ap*) の中で捧げられる祈り

中心と四方の空間構造は、マヤの伝統儀礼であるサカップ (*sak'ap*) でのメンの祈りの中にも残存している。

sak'ap はトウモロコシの粒を石灰を入れずに煮た後、粉にし、それをコマル (鉄板) の上で焦げない程度に焼き、コマルからおろして少量の水を加え柔らかくし、ボール状にしておいたものを水に溶いたものである (写真6参照)。マヤ・ユカテカの伝統的な食物の一つである。

儀礼として *sak'ap* は、四方と中心に置かれた5個のヒカラに *sak'ap* を入れて祈り、シップチェ

写真5 雨乞いの儀礼 (*cha'chac*) で祈るメン



写真6 サカップ (*sak'ap*)



(*shibchê*) の葉で *sak'ap* を少量すくって四方にまく行為である。この行為はメンの行う「水のための儀礼」、「土地のための儀礼」、「雨乞いの儀礼 (*cha'chac*) の儀礼」において中心的な要素をなし、頻りに繰り返されるだけでなく、メン以外の人々によってもミルパ、トウモロコシとの関連において極めてしばしば行われる。それらを中心と四方という観点からとらえ具体的に記述すると以下のようなものである。

(1) ミルパでの *sak'ap*

トウモロコシを植えつけるべき場所に行き、その土地の四方に棒を立て、それを目安に狭い道巾ほどに雑草を刈る。雑草を刈り始める前に *sak'ap* をする。シップチェ (*shibchê*) の葉で *sak'ap* をすくって、東 (*lakin*)、北 (*shaman*)、西 (*chikin*)、南 (*nojol*) の順にふりまく。

同じことを4月、5月に焼畑をする前に行う。

(2) 焼畑後の *sak'ap*

トウモロコシの栽培および生長、収穫の節目ごとに *sak'ap* が行われている。ミルパの焼畑の際に *sak'ap* をして捧げる祈りは、次のような内容である。

「ここで、私はこの *sak'ap* を、南風 (*nohol ik*) に捧げる、強いつむじ風 (*kakal mozonkanik*) に捧げる、また、偉大な東風 (*noh lakin ik*) に捧げる、また、私のミルパ (*col*) の4つの隅に捧げる、また、ここで、私はこの *sak'ap* を *balam* の神たち (*yum balamob*) に捧げる、北風 (*shaman ik*) に捧げる、西風 (*chikim ik*) に捧げる、南風 (*nohol ik*) に捧げる、偉大な *dios yumbil* に捧げる、San Miguelに捧げる、…… (後略)」

(3) トウモロコシの収穫祭における *sak'ap* (*sak'ap primicia* ; *huájik'ol*) での祈り

トウモロコシの収穫に感謝して行われる *sak'ap* (*sak'ap primicia* ; *huájik'ol*) の際には、次

のような祈りが捧げられる。

「(前略) …… 1つの聖なる、偉大なprimiciaが捧げられる、空の4隅に (kan titzkaan)、雲の4隅に (kan titzmuyal)、1つの聖なる、偉大なprimiciaが捧げられる、私の祈りが雷光の神chac (hatzenkaan chac) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りが雷火の神chac (lelemkaan chac) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りが雷鳴の神chac (boholkaan chac) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りが雷雨の神chac (chacleekaan chac) に届くとき、神霊は3度崇められる、空の4隅に、雲の4隅に、神霊に3度捧げ物が送られる、arcangel、1つの聖なる偉大なprimiciaが捧げられる、空の4隅に、…… (後略)」

これらの祈りに頻出する中心と四方の考え方は、別稿で論究したマヤ神ユンチロブ (yumtz'ilob) に関係する考え方と相互に結びついて、マニの人々の空間感覚の基本的部分を形作っている。

つまり、yumtz'ilobが自然の要素 (森、山野、藪、雨、水、風等々)、動物 (鹿、蜂、馬、犬など)、村、洞穴、井戸などの空間と深く結びついた存在であるように、バカップやチャックを含むマヤの神々は中心、四方、洞窟、井戸、自然などのマヤの空間に、またそのようなマヤ的な空間に古来存在してきた動植物に宿ると考えられているのである。

3) マヤ神ユンチロブ (yumtz'ilob) に捧げられる祈り

yumtz'ilobは、次に掲げる2つの祈りを材料とすると、ミルバ、肥沃な未開墾の地、種、種の植えつけられた畑、小丘、森、天、空、雲などを守る神たちと呼びかけられている。もし、pahuatunを一説にしたがって地下の神々とする、地下もそれらによって守られている。また、種々の地名 (6カ所) および洞穴名 (5カ所) に祈りが言及していることにも着目すべきであろう。村を守る神の観念の濃さと、洞穴という空間の重要性を示唆する一つのデータである。

祈り (1) 「メン (呪医=祭司) が捧げ物の置いてある聖壇の前に跪いて祈る」

「(前略) ……肥沃な未開墾の地の守り神たち、村を守る神たち、種を植えつけた畑を守る神たち (canan era)、[……]、小丘、[あるいは塚] を守る神たち (canan uitz)、肥沃な未開墾の地を守る神たち、森を守る神たち (u kuil kaax)、黒いPahuatunの神、赤いPahuatunの神、黄色いPahuatunの神、白いPahuatunの神、天の4つの隅の、雲の4つの隅の、私の祈りが雷光の神chacに届いたら、神霊は3度崇められる、私の祈りが雷火の神chacに届いたら、神霊は3度崇められる、私の祈りが雷鳴の神chacに届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りが雷雨の神chac

に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りがトウモロコシ畑を守る美しい女の守り神 (icna cichpan colel canan gracia) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りがトウモロコシを守る美しい女の守り神 (icna cichpan colebil metaan gracia) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りがトウモロコシが空腹である所 (icna noh uih gracia) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りが最も小さい、天のchac (icna tuppi caan chac) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りが偉大なchacの右手 (noh u kab nocte chac) に届くとき、偉大なbalamの手 (kab nocte biam) に届くとき、偉大な天の神の第一の聖壇 (yax mesa kuh tu noh caan) に届くとき、…… (後略)」

祈り (2) 雨乞いの儀礼 (cha'chac) の2日目に、メンがsak'apを捧げるときの祈り

「(前略)…雷鳴の神chacたち (ahbob lencaan chacob)、雷火の神chacたち (ahlelem caan chacob)、勅定係のchacたち (xoc tun caan chacob)、全ての階級のchacたち (ahchibintun chacob)、dios chac、dios chac、dios balam、雲の中の入口 (holtuntazmuyal)、私の祈りがZamal (Chac Komの近くの洞穴) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りがX-Cehni (Cuncunulの近くの洞穴) に届くとき、神霊は3度崇められる、私の祈りがX-cumzuc (Pixoyの近くの洞穴) に届くとき、神霊は3度崇められる、……ここTicinacab (地名: 乾上がった洞穴がある) で、私の祈りがX-katbe (San Diegoの近くの洞穴) に届くとき、神霊は3度崇められる、…… (後略)」

yumtz'ilobは東の空にいると考えられている。しかも、天・空・雲の4隅を守るとされている。したがって、次の祈りのように、人々がトウモロコシで作った食物、sak'apやbalcheを神たちに捧げると、それらは降りてきて供物を受け取ると信じられている。供物は生ものではなく、全て煮たり、炊いたりしたものである。こうして、供物と祈りが正しく捧げられているかぎりはyumtz'ilobは人々を悪い風で罰して病気にしたり、かれらの畑や家畜などに害を及ぼすことはないのである。

祈り (3) 「メン (呪医=祭司) が供物の1つ1つを手にとって唱える祈り」

「(前略) ……私は祈る、それらの神たちが来て捧げ物を受け取る、1つの聖なる偉大な聖壇 [において]、聖壇の4つの隅において、ここに、肥沃な未開墾の地を守る神たちが降りてきて…… (後略)」

祈り (4) 「家禽や家畜の肉を聖別するときの祈り」

「(前略) ……ここ、1〔人〕のchac聖壇の前に、偉大な東にいる、ここ、San Miguelの聖壇の前に、…… (後略)」

中心と四方という考え方は、古代マヤの人々の現実の生活の空間感覚の基礎的な部分を構成している。この考え方は集団の断面で共有されて、マニの人々の現実の生活を強く規制してきている。そこでこの考え方が現在のマヤの人々の空間感覚の中にどのように存続変容してきているかを分析することが課題になる。つまり、中心と四方という考え方がマニの人々によってどのように分有されてきているかを分析し、その分析結果と考古学および歴史学の史資料によって解明されている事実と総合し、マニの人々の空間感覚を抽出する課題である。

この課題を解決する一つの方法は、有意味写真を使用して、空間感覚を個人の断面で取り出し、空間感覚が分有されてきている実態を明らかにすることである。この具体的方法については、後述する。

III マニの土地と所有地の歴史的展開—共有地という考え方—

ここではマニの人々の空間感覚を明らかにするためにマニの土地と所有地の歴史的展開をたどる。

土地は労働と生産という経済的活動の土台であり、また所有と支配という政治的活動の基盤となっている。種々の土地に対してマニの人々がどのような空間感覚を持っているかを有意義写真を使用して取り出すために、まずマニの土地と所有地の歴史的展開をたどり、それらのうちのどの部分がどのような形で現在のマニの人々に継承されてきているかをたどる。

1 16世紀中葉のマニの社会構造

16世紀中葉のマニの村落共同体は、リーゼ (F. J. Riese) の調査によると¹³⁾、Ah-村落名-obという形で表わされていた。

Ah-obは、2あるいは4の下位組織 (Cuchteel) に分割され、Ah-obの長 (Vbatabil Cah) がその下位組織Cuchteelの長を任命した。これらのAhcuchcabとVbatabilは、複数のAh-obの統治者 (Halach Vinic) の支配下に置かれていた。

- (1) Halach Vinic (複数のAh-obの統治者：州あるいは県知事)
- (2) Vbatabil Cah (各Ah-obの長：これを通じてHalach VinicはAh-obを支配する)
- (3) Ahcuchcab (Cuchteelの長：Ah-ob共同体の評議会の長)

(4) Cuchteel (各Ah-obの下位組織)

Halach Vinicの称号はスペイン人による史料の中には発見されないことから、スペイン人による征服時にはHalach Vinicは実在しなかったと考えられる。スペインによる征服後は、スペイン語Señorが使用された。Halach Vinicは各Ah-obに徴税人を派遣し税収を獲得し、また、狩猟、漁業、製塩の共同作業の一部を徴収した。製塩の認可権と一定の土地の割当権を有していたが、これらの権利は父系系譜を通じて世襲された。

Vbatabil CahはAh-ob内の司法権を持ち、家屋、農場の経営状況やAh-obの会計を検査し、綿織物を共同体の女性に配付し、軍を指揮した。これらの任務は植民地時代のカシーケ (Cacique or Gobernador) の任務と同一であった。スペイン人による統治は各Ah-obに土着住民の支配者を任命する方策をとっていたのである。

マニでは、一人のカシーケがその任を負った。当時のマニの8人の支配者のうち7人はカシーケであり、マニの近隣共同体の7人の支配者のうち5人はカシーケであった。

AlmehenobはAh-obの上層階級の出身者であり、Ah-obの中心である洞窟 (cenote) の近くに住んでいた。自分のために収穫の一定量、土地開墾、軍役、家屋建造を要求する権利を持っていた。

2 マニの共有地

このAh-obは次のような社会経済的組織と共同作業の単位として機能していた。

- (1) 祝祭と奴隷貿易のための共有地を有していた。
- (2) 共同体集会所 (Camolna) が設置され、そこでは住民を統括するエンコメンデーロ (Encomendero) への労役の一環として女性が働いていた。スペインによる征服までは、共同体会議はポポルナ (Popolna) と呼ばれ、ハルポップ (Holpop) がそれを管轄していた。
- (3) 狩猟は50人前後編成の集団で行われ、一頭の鹿の分割は獣皮、内臓、両脚を射止めた本人へ獲得し、残りをAh-obで分配した。
- (4) 漁労と製塩も共同作業であったが、水産物や塩はHalach Vinic、Vbatabil CahとAlmehenobに進貢物として納められた。鶏、綿、軍役、Halach Vinic、Vbatabil CahとAlmehenobの家屋建設も労役であった。

各Ah-obは、共有地 (tierras comunes) を持っており、その土地はHalach Vinic、Vbatabil Cah、Almehenobのような上層階級の人々に属していた。例えば、Vbatabil Cahは、100、200、300メカテ (1メカテは20m×20m) が割り当てられており、その土地の耕作は住民の労役であった。しかし、Vbatabil Cahの支配下で働くAhcuchcab (Cuchteelの長) への土地の配分はなかった。首長 (Principal) あるいは支配者 (土地史料ではスペイン語でRegidorと表される) であるAhcuchcab

は、*Vbatabil Cah*に随行し、*Vbatabil Cah*の任務を代行していた。かれらの主な任務は、土地の境界を確定すること、徴税、軍役への徴集、祝祭の遂行であった。

マニには、かつて、これとは別形態の共有地が存在した。その共有地は共同体のミルパ (milpas de comunidad) と呼ばれ、共同体全体のために耕作が行われ、ここからの収穫の全ては穀物倉庫に保管された。マヤの夫婦一組 (*Hum Vinic*) には20×20ピエ (フィート) 分の植付けが割り当てられた。

マニの第3の共有地はその土地の使用権 (the right to use the land) を所有することを条件に耕作が許された。この土地の使用権の所有者は、その土地からの収穫で自活し、政府に物納支払いをする義務があった。カカオ栽培のための土地 (hoyas y cuevas de cacao) 使用はこの形態をとっていた。20人編成の集団がこの土地で共同作業をしたが、かれら以外に労働者を雇うことはできず、1メカテ当り20カカオ豆が土地所有者から支払われた。集団によるこの種の共同作業の場合は、労働者はチバル (*Chibal*) と呼ばれる系譜から徴集された。

上記の3形態の共有地の他に、*Upach Cahalob* (村落共同体の共有地)、*Uxotol Upach Cacahal* (共同体の中の私有地を分割した土地)、*Tulacal Vtialil Ah Calkiniob* (*Calkini*の所有地) が存在した。

16世紀のマニにはこれ以外にも数種の共有地が存在したが、その実態を明らかにする史料はまだ発見されていない。

歴史的史資料が示すように、各*Ah-ob*は、共有地 (tierras comunes) を持っており、土地の共有という考え方はマニの社会と文化の基底を貫いて存続変容してきている。その一部分は次に明らかにするマニの土地と所有地のあり方に残存している。

IV マニの土地と所有地—土地の公共性という考え方—

現在のマニは、fundo legal (法定所有地)、tierra de propiedad (所有地)、tierras ejidales (エヒード) の土地形態が存在している。

Fundo legalはSolarとJocaを含んでいる。Solarは、個人所有の敷地であり、*Jum Ac In Wotoch* (9メカテ)、*Ca'Ac In Wotoch* (18メカテ)、*Tancuch Ac In Wotoch* (4.5メカテ) で構成される。

*Joca*は3、4ヶ月期間限定の貸付地で、一般的には、スイカ、唐辛子、かぼちゃ、トウモロコシが植え付けられる。この土地形態はユカタンの他の村落では見られない。

fundo legalの周囲に私有地が展開し、最も肥沃であるにもかかわらず、他方では最も有効利用されていない土地とも言われている。

革命があったが大土地所有者にこの土地を他の人々に譲らせることはできなかった。この土地は最も肥えているが、十分に使用されていない。われわれがこの土地を借用する

と、100メカテ当り10カルゴ (1カルゴは42キロ) を支払わなければならない。一人の大土地所有者は1,000ヘクタールの土地を所有しているが、本人は大部分の土地を使用していない。だからマニには土地が足りないのだ。このように土地を遊ばせておくのであれば、もう一度革命が起こるであろう。

エヒードは革命がもたらした共有地であり、マニでは、3ヘクタール、2ヘクタール、1ヘクタールの3種類のエヒードがある。エヒードは、*ko'ot* (石垣) で囲まれ、milpas (トウモロコシ畑) とparcelas (耕作地) がこれに含まれる。

メキシコにおいては、エヒードとよばれる土地は次の3種類をさしている。

- (1) 村の共有地で集落に隣接して存在し、家畜の囲い場あるいは雑穀の作業場として村民の共同利用に使用されていた土地
- (2) 村落共同体の共有地の一部で、村民に共同で利用される牧草地あるいは山林など
- (3) 1917年憲法27条にもとづいて、大土地所有が解体され、小土地所有が育成されることにもなって創設された土地で、一定の範囲の土地の利用権を国から与えられた農民の集団組織ならびにそれに属する土地

1917年憲法27条によって創設されたエヒードの土地は、私有地とは異なる原理のもとに置かれ、売買、譲与 (ceder)、移転 (traspasar)、譲渡 (enajenar)、賃貸借 (arrender)、抵当 (hipotecar) の対象とならない。エヒードの土地の利用者はエヒダタリオ (ejidatario) と呼ばれるが、その権利は通常親から子へ継承される。

エヒードの土地は、居住地域、耕地、牧草地、山林の4種類から構成されている。耕地を共同で耕作するか、あるいは各エヒダタリオの分割耕地にして個別に耕作するかは、原則として、彼らの間で自主的に選択される。個別耕作の場合、個々のエヒダタリオは分割地の用益権を有するのみで処分権を持たない。用益権だけが親から一人の子に承継されるのである。

牧草地と山林は常に共同で利用される。

現在、メキシコには私的農場とエヒードが存在しているが、エヒードは農場総面積の約50%、耕地面積の55%、灌漑地面積の約5割を占めている。

図3が示すように、マニにも以上の歴史的背景をもつエヒードが存在し、人々の現実の生活の土台となっている。

エヒードに関して法に違反した行為が現実に起こっているが、エヒードの精神は土地の公共性を尊重し、公共財としての土地の使用権を重視することである。土地の公共性の考え方は、マニの人々の生活の基盤として、古代マヤにおいては *Upach Cahalob* (村落共同体の共有地)、また、植民地時代には *コムニダ・インディヘナ* (*comunidad indigena* マヤの伝統的な土地共有形態) が存在し、その土地の使用権 (the right to use the land) を所有することを条件に耕作が許された。この土地の使用権の所有者は、その土地からの収穫で自活し、政府に物納支払いをする義務があった。古代マヤのカカオ栽培のための土地 (*hoyas y cuevas de cacao*) 使用はこの形態をとっていた。

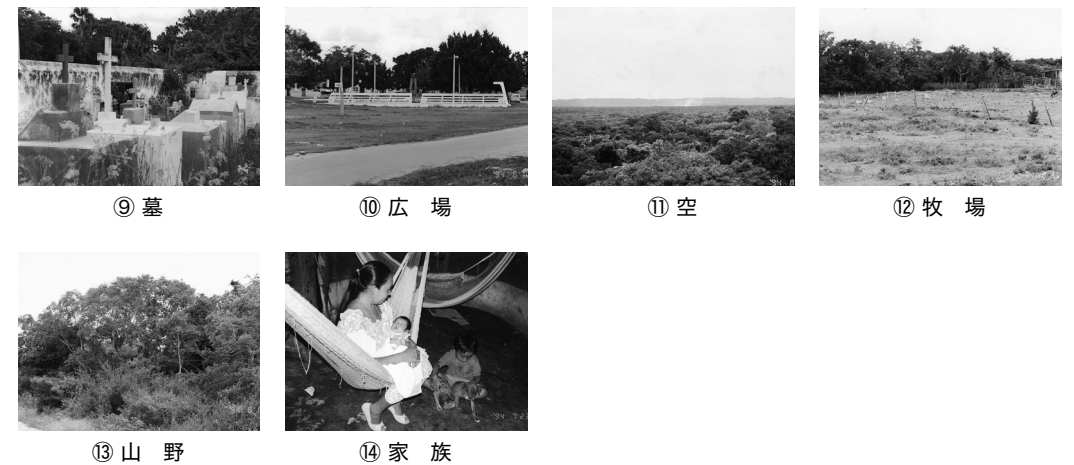
エヒードはマニの社会と文化の基層をなしてきた土地の公共性を継承している土地制度であり、エヒードに対する空間感覚を調査することは、マニの人々の空間感覚の分析に対して非常に重要な意味を持っている。

V 有意味写真を使用した空間感覚の分析

以上の空間構造、空間感覚はマニの人々によって集団レベルで共有されている一側面であるが、空間感覚は集団のレベルだけでなく個人のレベルでも調査されなければならない。空間感覚が個人のレベルで分有されている実態を分析し、その結果と集団レベルで共有されている実態とを総合して空間感覚の全体とするべきである。

そこで、マニにおける空間感覚を個人レベルで抽出する具体的方法として、有意味写真14枚を使用する。

有意味図版は全部で14枚であり、ここに提示したように、それぞれ①トウモロコシ畑 (milpa)、②パルセーラ (*parcela*)、③教会、④家庭祭壇、⑤学校、⑥運動場、⑦役場、⑧家屋敷、⑨墓、⑩



広場、⑪空、⑫牧場、⑬山野、⑭家族、を表す写真で構成した。

これらの写真を被験者に見てもらった後、次のように依頼する。

- (1) これらの写真をあなたにとって大事な順番に並べてください (coloque estas fotos en fila según le parece a usted valioso)。
- (2) それぞれの写真があなたにとってどのように大事かを簡潔にお話ください (haga una breve descripción por qué se colocó así)。

この方法による調査から期待できることは、

- (1) 教会、家庭祭壇、墓のような宗教的な空間と非宗教的空間がどのように区別されて表現されるか、
- (2) 家族、家屋敷、トウモロコシ畑、パルセーラのような自分にとって身近な空間がそれ以外の空間とどのように区別されて表現されるか、
- (3) トウモロコシ畑や山野などのようなマヤ的な空間とそれ以外の空間がどのように区別されて表現されるか、
- (4) 教会、広場などの中心とそれ以外の空間がどのように区別されて表現されるか、そしてその場面でマヤ的な中心 (*kiwic* 例えば洞窟やセイバの木などを含む空間) に言及されることはあるのか、
- (5) エヒードやパルセーラの持つ共有地の観念に言及されることがあるのか、
- (6) 空、山野のようなマヤ伝来の自然の空間がどのように表現されるのか、そしてその表現は人工の建物との対比で表現されることはあるのか、
- (7) 家庭祭壇と教会はどのように区別されて表現されるのか、

- (8) 墓は死やこの世との関係でどのように表現されるのか、
- (9) エヒードやパルセーラで働くことはどのように表現されるのか、
- (10) 写真について何かを表現するとき、被造物感に言及されることはあるのか、

などに焦点を当てて被験者が物語る内容を分析することである。

この方法による調査から蒐集できる空間感覚に関する内容を、従来、別の方法によって蒐集した空間感覚に関する内容と総合することによって、マニの人々の空間感覚の全体をより厳密に構成するが、その論考は別稿で試みたい。

VI おわりに

本稿では、マニの空間感覚分析の序論的考察のために、最初に、考古学と歴史学の史資料を使用して、低地マヤの一カトリック村落マニに関係するマヤ的な空間構造の一側面を提示し、次に、その古代マヤ的な要素はスペイン人による征服後のヨーロッパ的・カトリック的要素と混在し複合しつつ存続してきている実態を提示し、それらの考察を踏まえて、空間感覚を個人レベルで抽出する具体的方法を提示した。

空間構造は、時間構造とともに、社会や文化の基底に存在して人々の考え方や行動を規制するので、人々によって共有され分有されながら長期間にわたって残存する。この意味で、マニの人々の空間感覚を分析するためには、古代マヤの空間構造を把握し、それらの残存を視野に入れて調査する必要がある。

古代マヤの空間構造の特徴の一つである中心と四方という考え方は、古代マヤの人々の現実の生活の空間感覚の基礎的な部分を構成している。この空間感覚はマヤの伝統的思考を継承してきている伝統医(メン *men* 呪医=祭司)の祈りの中に、また、マヤの伝統儀礼であるサカップ(*sak'ap*)でのメンの祈りの中に、さらにマヤ神ユンチロブ(*yumtz'ilob*)に捧げられる祈りの中に現在も色濃く残っている。

調査地マニは古来マヤ・シュウ(Xiu)族の首都であったことから、スペイン人による征服後も地域の首府でありつづけ、マニを囲んで8方位に各村落とカトリック教会が分布している。このような歴史をたどってきたマニには、古代マヤ的な要素とスペイン人征服後のヨーロッパ的・カトリック的要素が混在し複合しつつ存続してきているが、いずれの場合にも地域の中心という考え方が継承されてきているのである。

この空間構造はマニの中心をめぐる明確に継承されてきている。

カトリック村落であるマニの空間はカトリック教会を軸に構成され、その中心はセントロ(El Centro スペイン語で中心地の意味)と呼ばれている。セントロには1548年に設立されたカトリック教会がそびえ立ち、そこを中心に守護聖人サン・ミゲル・アルカンヘル(San Miguel

Arcangel)と聖母ヴィルヘン・デ・アスンシオン(Virgen de Asunción)のための祝祭が行われ、セントロを起点として6居住区域(バリオ Barrio スペイン語で区、地域、区域の意味)が放射線状に位置し、各居住区単位でそれぞれ教会を有している。

カトリック教会を軸とするセントロとは異なるもう一つ別のマニの中心はキーウィク(Kiwic マヤ語で中心の意味)と呼ばれ、マヤの説話伝承や儀礼慣習がきわめて重要な意味を与えている洞窟(アクトゥン *actun* マヤ語)とセイバ(*ceiba*)の木の近辺を指す。キーウィクは現実にはセントロと隣接して存在するが、スペイン人による征服前の古来マヤの中心であった。

マニのヨーロッパ的・カトリック的空間の中心であるセントロは、メスティーソ(Mestizo 白人とインディオとの混血)の政治経済的活動の拠点であり、スペイン語を日用語とする住民が暮らしている。これに対して居住区バリオは、ヨーロッパ的・カトリック的空間の中心であるセントロに対して周辺を形成すると同時に、古来マヤの中心であるキーウィクに対しても周辺を形成していたため、マヤの伝統的な居住区域であり、マヤ系譜の人々がマヤ語を日用語として棕櫚と白色壁土のマヤ伝来の家屋に住んでいる。

セントロとバリオは教会を軸とする中心と周辺の空間構造であると同時に、古代マヤの中心と周辺の空間構造と交叉し、スペイン人による征服後メスティーソがセントロに居住し政治経済的活動の支配権を掌握したことから、ヨーロッパ的・カトリック的要素対マヤ的要素の空間を構成しているのである。

マニにはセントロとバリオという中心と周辺の空間構造が存在していると同時に、中心と四方の空間構造も存在している。

中心と四方という考え方は、古代マヤの人々の現実の生活の空間感覚の基礎的な部分を構成している。この考え方は集団の断面で共有されて、マニの人々の現実の生活を強く規制してきている。そこでこの考え方が現在のマヤの人々の空間感覚の中にどのように存続変容してきているかを分析することが課題になる。つまり、中心と四方という考え方がマニの人々によってどのように分有されてきているかを分析し、その分析結果と考古学および歴史学の史資料によって解明されている事実と総合し、マニの人々の空間感覚を抽出する課題である。この課題を解決する一つの方法は、有意味写真を使用して、空間感覚を個人の断面で取り出し、空間感覚が分有されてきている実態を明らかにすることである。

空間感覚を調査分析する場合、土地がどのようにとらえられているかは重要な意味を持つ。土地をめぐるっては、土地の私的所有権ならびに財産権を尊重し、その私的所有権に対する公権力の介入や制限を最小にする考え方がある一方、土地の公共性を尊重し、公共財としての土地の使用権を重視する考え方がある。メキシコ憲法27条は、後者の考え方に重心を置き財産権を制限するという特徴をそなえている。

マニのエヒードの精神は、メキシコ憲法27条に表明されているような土地の公共性を尊重し、公共財としての土地の使用権を重視することである。土地の公共性の考え方は、マニの人々の生活

の基盤として、古代マヤにおいては *Upach Cahalob* (村落共同体の共有地)、また、植民地時代には *コムニダ・インディヘナ* (comunidad indígena マヤの伝統的な土地共有形態) が存在し、その土地の使用権を所有することを条件に耕作が許された。この土地の使用権の所有者は、その土地からの収穫で自活し、政府に物納支払いをする義務があった。古代マヤのカカオ栽培のための土地使用はこの形態をとっていた。

エヒードはマニの社会と文化の基層をなしてきた土地の公共性を継承している土地制度であり、エヒードに対する空間感覚を調査することは、マニの人々の空間感覚の分析に対して非常に重要な意味を持っている。

これらの空間構造、空間感覚はマニの人々によって共有されている一側面であるが、空間感覚は集団のレベルだけでなく個人のレベルでも調査されなければならない。空間感覚が個人のレベルで分有されている実態を分析し、その結果と集団レベルで共有されている実態とを総合して空間感覚の全体とするべきである。本稿では、有意味写真14枚を使用して空間感覚を個人レベルで調査分析する具体的方法を提示し、マニにおける空間感覚分析の序論とした。

現在継続的に実施している有意味写真を使用し、その調査結果は別稿に譲りたい。

注

1) 拙稿参照。

1985年 「メリダ周辺地域マニにおける「熱い」／「冷たい」二分法とメン (呪医=祭司について)」『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究 (Ⅲ)』 pp. 339-377

1987年 「ユカタンの一村落マニにおけるメン (呪医=祭司) と雨乞いの儀礼 (cha'chac) について」『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究 (Ⅳ)』 pp. 225-254

1989年 「マニにおけるメン (呪医=祭司) と儀礼慣習と擬制的親子関係 (padrinazgo-compadrazgo)」『南部メキシコ村落における宗教と法と現実』 pp. 129-150

1991年 「マヤ・ユカテカ地域の一村落マニにおける聖像と病気」『比較文化研究』10輯 pp. 91-123

1993年 「マヤ・ユカテカの一村落マニにおける婚姻形態について—駆け落ち婚 (pudz) の事例を中心に—」『比較文化研究』15輯 pp. 123-149

1995年 「マヤ・ユカテカの一村落マニにおける儀礼的親子関係」『地域総合研究』5号 pp. 53-64

2007年 「宗教の太古性と残存性に関する一考察—マヤ・カトリック村落マニにおける口頭伝承を材料として—」『宮崎公立大学人文学部紀要』第15巻第1号 pp. 195-232

2) 石井 章 1975年 「メキシコの集団ソシエダー」『日本と世界の農業共同経営』 小倉武一編 御茶の水書房 p. 152

山崎 将文 1989年 「メキシコ合衆国憲法27条のエヒード (ejido) の実態について」 pp. 125-158

3) Wendy Ashmore edited 1981 Lowland Maya Settlement Patterns.

University of New Mexico Press. pp.361-364

R.E.W Adams and Woodruff D.Smith

1981 Feudal Models for Classic Maya Civilization. University of New Mexico Press. pp. 335-349.

R.E.W Adams¹とWoodruff D.Smithは、各マヤ共同体の位階の最上位にはBatabが位置していたと指摘している。

4) Joyce Marcus 1973 Territorial Organization of the Lowland Classic Maya. Science. Vol.180. No.4089. p. 916

Joyce Marcosによると、村落自治の分担は時計回りの方向で隣接村落に交替し、Ah Cuch Cabs (今日のMayordomoに相当する) がその責務を負っていた。マヤ社会は4区域構造 (quadripartite organization) で、各区域には最低5行政位階 (首府、第二次首府、第三次首府、村落、小村落) が存在した。

5) Michael D.Coe 1987 The Maya. Thames and Hudson. p. 164

地球は平板で4隅 (four-cornered) があると考えられ、空は多層 (multi-tiered) で空の各隅はそれぞれBacabが守護し、各隅には色がついていた。空は異なる色で異なる種類の4本の木で支えられ、中心にはセイバの木、つまりパンヤ (silk-cotton tree) が植えられていた。

6) Ibid., pp. 99-100

マヤ暦は二十進法による太陽暦で、1カ月20日、1年18カ月、不吉とされるワエブUayeb 5日からなる365日である。閏日は置かない。日は20個の名称と1から13までの数を組み合わせた260日で循環し、1年は365日であるから、1年で5日分ずつ日の名称はずれていき、52年を経過して同月同日に同じ名称に戻る。マヤ暦の周期 (52-year Calendar Round) は52年である。

7) Joyce Marcus 1973 op.cit., p. 912

8) ibid., p. 912

Joyce Marcusは北アメリカインディアンのHopi、Tewa、Oglala Siouxにも色と方位の空間構造があると指摘している。

9) Michael D.Coe 1965 A Model of Ancient Community Structure in the Maya Lowland. Southwestern Journal of Anthropology. Vol.21., No.2. pp. 97-114

Michael D.Coeは父系制 (Ch'ibal) は外婚規制だけでなく、行政と土地の相続においても重要な機能をはたしていたと指摘している。

10) Richard A.Thompson 1974 The Winds of Tomorrow. The University of Chicago Press. pp. 22-35.

11) 拙論参照

- 2002 *Some Aspects of Social Structure of a Mayayucatecan Catholic Community, Mani.*
Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities. Vol.9 No.1
 pp. 137-152
- 2003 *Ritual Kinship and Ejido in a Mayayucatecan Catholic Community, Mani.*
Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities. Vol.10 No.1
 pp. 228-233

12) 拙論参照

- 1996 *The Structure and Function of Ritual Kinship in a Maya Yucatecan Catholic Community, MANI.*
Bulletin of the Center for Regional Studies. Vol. 6 pp. 77-96
- 2001 *Marriage Form in a Mayayucatecan Catholic Community, Mani—with special reference to Pudz—*
Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities. Vol. 8 No. 1 pp. 205-220

- 13) Frauke J.Riese 1981 *Indianische Landrechte In Yukatan Um Die Mitte Des 16.Jahrhunderts.* ss. 1-222.

References

Wendy Ashmore edited

- 1981 *Lowland Maya Settlement Patterns.*
 University of New Mexico Press. pp.361-364

Joyce Marcus

- 1973 *Territorial Organization of the Lowland Classic Maya.*
*Science.*Vol.180.pp.911-916

Michael D.Coe

- 1965 *A Model of Ancient Community Structure in the Maya Lowland.*
*Southwestern Journal of Anthropology.*Vol.21.,No.2 pp.97-114
- 1987 *The Maya.* Thames and Hudson. p.164

Frauke J.Riese

- 1981 *Indianische Landrechte In Yukatan Um Die Mitte Des 16.Jahrhunderts.*

Hamburg. ss.1-222.

R.E.W Adams and Woodruff D.Smith

- 1981 *Feudal Models for Classic Maya Civilization.* University of New Mexico Press.
 pp.335-349.

Richard A.Thompson

- 1974 *The Winds of Tomorrow.* The University of Chicago Press. pp.22-35.
- 1974 *Aires de Progreso.* INI. Mexico. pp.37-52

Harukazu Nakabeppu

- 1987 *Men (Maya medical doctor), Maya rituals, and compadrazgo in Mani.*
Study of Catholic Culture in the Southern Part of Mexico IV. pp.129-150.

引用参考文献

中別府 温和

- 1985年 「メリダ周辺地域マニにおける「熱い」／「冷たい」二分法とメン（呪医＝祭司について）」
 『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究（Ⅲ）』 pp. 339-377
- 1987年 「ユカタンの一村落マニにおけるメン（呪医＝祭司）と雨乞いの儀礼（cha'chac）について」
 『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究（Ⅳ）』 pp. 225-254
- 1989年 「マニにおけるメン（呪医＝祭司）と儀礼慣習と擬制的親子関係（padrinazgo-compadrazgo）」
 『南部メキシコ村落における宗教と法と現実』 pp. 129-150
- 1991年 「マヤ・ユカテカ地域の一村落マニにおける聖像と病気」
 『比較文化研究』10輯 pp. 91-123
- 1993年 「マヤ・ユカテカの一村落マニにおける婚姻形態について—駆け落ち婚（pudz）の事例を中心に—」
 『比較文化研究』15輯 pp. 123-149
- 1995年 「マヤ・ユカテカの一村落マニにおける儀礼的親子関係」
 『地域総合研究』5号 pp. 53-64
 『マヤ・ユカテカの一村落マニにおける奇跡について（1）—メンの病気治療の事例を中心に—』
 『比較文化研究』17輯 pp. 111-152
- 2007年 「宗教の太古性と残存性に関する一考察—マヤ・カトリック村落マニにおける口頭伝承を材料として—」
 『宮崎公立大学人文学部紀要』第15巻第1号 pp. 195-232

Harukazu NAKABEPPU

1996 *The Structure and Function of Ritual Kinship in a Mayayucatecan Catholic Community, MANI.*

Bulletin of the Center for Regional Studies.

Vol.6 pp.77-96

2001 *Marriage Form in a Mayayucatecan Catholic Community, Mani — with special reference to Pudz—*

Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities.

Vol.8 No.1 pp.205-220

2002 *Some Aspects of Social Structure of a Mayayucatecan Catholic Community, Mani.*

Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities.

Vol.9 No.1 pp.137-152

2003 *Ritual Kinship and Ejido in a Mayayucatecan Catholic Community, Mani.*

Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities. Vol.10 No.1

pp.217-233